

日本人と中国人の世間観——諺に見られる 言語表現からの検証と考察——

黄 欣

0. はじめに

一般に、言語表現の上から、その言語を使用する民族集団の文化的特色を見て取ることができる。特に、日常生活から生まれ、民衆の知恵の結晶として使われてきた諺は、各民族それぞれの伝統的な物の見方・考え方を濃厚に反映している。元来、諺は民衆の知恵の総合とも言うべきものであることから、異なった民族の諺でも、形式から内容まで共通性をもっているものもあるが、諺は各民族の民衆によって作り出されたものであり、各民族の歴史、地理環境、生産活動および人々の生活習慣、思考の方式などに差異があるため、各民族の自然観、世間観、人生観などの面にその民族固有の特性、文化の特色が見られ、諺にそれが反映されている。本稿では、日本と中国の諺を分析し、諺に見られる言語表現の上から両国の人々の世間観の特徴を検証し、考察していく。

なお、本稿では主として日本の諺をもとに、それと対応する中国の諺を取り上げて比較するが、中国の諺の中でも漢民族の諺を、また特に、両国でも一般の民衆たちによく知られ、生活の中でよく使われている諺を取り上げる。同時に、日本と中国それぞれの独自の諺も考察の対象とする。

1. 諺について

1. 1. 日本の諺の定義

諺の定義については、藤沢（1960）によれば、日本の諺には広義と狭義の二種類の定義があるとし、「広義とは、どんなことばでも、一定の形をとって、俗間に伝唱されれば、みなことわざである」¹としている。藤沢によれば、日本語の慣用句、歌謡、なぞは、すべて諺ということになり、「ただ一つの形容詞であっても、それが一定の形をとって、常にある種のことがらを形容するものとして知られていけば、それはすでにことわざである」²とまで述べている。

狭義の諺について藤沢は、「ある種類の教訓、警戒、風刺、またはその他の視察経験による知識をいいあらわしたものである」³としている。これについて、金子（1969）は次のように説明している。

ことわざは……民衆の中からいわばおのずから生まれ出たものである。……民衆がその体験によってみずから得た教訓なのである。……いわば、民衆同士が肩を叩いての忠言、助言である。⁴

ことわざは、民衆がその実際生活の体験の中から、人間や人生に対する批評として生み出したものであり、また逆に、人間や人生を批評する場合にも用いられるものである。⁵

すなわち、諺は民衆により作り出された教訓であり、民衆同士の間の忠誠のことばであるが、この点について金丸（1983）は、「ことわざは、日常経験から生まれた民衆の知恵の結晶であり、民衆の行動の指針と言えます」⁶と述べている。

1. 2. 中国の諺（谚语）の定義

中国では、諺は一般に“諺”とか“語”とか、あるいは“谚语”とか呼ばれている。近代になって、中国の諺にも広義の定義と狭義の定義がある。広義の諺とは、人々の話し言葉に広く伝わっている俚諺、俗語のすべてを指すという見解であり、慣用語、歇後語などをもそれに含まれる。狭義の諺については、近代では多くの先行研究で郭紹虞の定義が採用されてきている。郭（1948）は、

諺とは、人間の実際の経験の結果であり、美しい語彙を用いて表現され、日常会話で、自由に使われて、人間の行為を規定する言語である。⁷

と定義している。80年代に入ると、狭義の諺の定義について、いくつかの見解が現われた。

武占坤、馬国凡（1983）は、

谚语是通俗简练,生动活泼的韵语或短句,它经常以口语的形式,在人民中间广泛地沿用和流传,是人民群众表现实际经验或感受的一种“现成话”。⁸（諺とは、だれにも分かりやすく簡潔で、生き生きとした韻文または短文である。諺は、一般に口語の表現形式によって民間に広く用いられ伝えられるもので、民衆が生活上の体験や感動を表現する一種の「既成語」である。）

と定義し、そして唐啓運（1981）は、

谚语是熟语的一种,是群众口头上广泛流传的一种现成而固定的句子。⁹（諺とは、熟語の一種であり、民衆の間で話し言葉として広く流布している固定的な既成語である。）

谚语是群众智慧的结晶,是群众……对各方面的经验作的简洁有力的总结和概括。¹⁰（諺は、民衆の知恵の結晶であり……さまざまな経験が簡潔に、力強く総括されたものである。）

と解釈している。これらの定義に共通していることは、諺が民衆の実際の体験を総括したものであって、体験を伝えることを目的としているという点である。また、温端政は、「ことわざには、もう一つ別の働きがある。それは、客観的な事柄についての認識を伝えるという役割である」¹¹と述べている。

以上から、中国語において諺（谚語）は、民衆によって作り出され、民衆の知恵、経験、認識を広く伝え、比較的固定的であって、簡潔で口語性の強い話し言葉であると定義することができよう。

1. 3. 両国の諺の定義における共通点

両国の諺の共通点をまとめてみると、次のようになる。

- ① 特定の作者がなく、民衆に作り出され、経験や認識を伝えるものであること。
- ② 古くから口伝えによって伝えられてきて、継承されてきたものであること。
- ③ 簡潔で通俗的であり、口語性が強いものであること。
- ④ 比較的定形性を有すること。ただし、その定形性は相対的なものであり、構造上かなりの融通性があること。
- ⑤ 民族の歴史や風俗、文化と深くかかわっているものが多いこと。

1. 4. 諺と世間観との関わり

以上述べたように、日中両国において、諺の定義には共通点が多く存在している。諺は社会に生活する多くの人々の共通感覚として、名も知れない民衆により作り出され、多くの人々に用いられてきている。諺には人々が自然や社会的実践から得た経験や認識を表わすものが多いので、諺を分析することによつ

て、自然や社会に対する人々の見方・考え方が窺い知れる。加えて、諺はその民族の歴史や風俗、文化と深くかかわっているものが多く、その民族特有の民族性が濃厚に反映していることによって、日本と中国の諺から両国の人々に特有の世間観も窺い知ることができよう。

2. 世間観について

人間と社会の関係について、四つの議論があると指摘されている。すなわち、①社会は個人の集合体であるが、個人は社会より重要な単位であるとする個人主体論、②社会は個人の総合以上のものであるとする社会有機体論、③個人と社会は互に関係し合うと考える個人社会相互論、④個人と社会は対立する概念ではなく結局は同じもの、あるいは次元の異なるものとして対置すると考える融合論の四つである。¹²

2. 1. 日本人の世間観

穴田(1982)は、個人と社会について日本人は、「社会は個人の総合以上のものである」という社会有機体説のように、極端ではないにしろ、社会優位の行動傾向を有する国民であるとされている¹³と指摘している。この日本人特有の世間観が、諺にどのように反映されているのかについて検証してみよう。

例えば日本の諺には、次のようなものがある：

壁に耳あり障子に目あり
旅の恥はかき捨て
あとは野となれ山となれ

これらの諺からは日本人の社会に対する見方や考え方が窺い知れる。すなわち、「壁に耳あり障子に目あり」は、日本人は行動するときに、いつも他人あるいは社会が自分をどう見ているか、社会にどう思われているかということが気になり、自分の行動が他人の目に左右されることがあるが、ここで言う「他人」とは身近にかかわりのある「他人」のことである。だからこそ、身近にかかわりのある「他人」の範囲を超えた他人や社会に対しては、「旅の恥はかき捨て」や「あとは野となれ山となれ」となるのである。

文化人類学者ルース・ベネディクトは、文化には「罪の文化」と「恥の文化」の二つのパターンがあるとし、その書『菊と刀』において、日本文化について

言及し、結論として日本文化は「恥の文化」の代表であるとしている。この知見は、現在ほぼ定着している。ベネディクトが指摘したように、日本人は行動の根幹に常に身近にかかわりのある他人を意識し、その他人に対して恥かしいという意識が行動を起させたり止めさせたりするのである。日本人が罪の意識よりも恥の意識を重視するのは、武士階級成立以来の伝統と幼児期から恥を強調する教育を続けてきたためとベネディクトは見ている。この「恥」に関する諺は、日本には相当数ある。例えば、

恥は家の病
 恥の上塗り
 仰いで天に恥じず
 言わぬ心に恥じよ
 恥を言わねば理が聞こえぬ
 恥を知らねば恥かかず
 恥を知る者は恥かかず
 聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥

などは、いずれも「恥」に関する日本人の考え方を表わしており、日本人の心性の中には身近のかかわりのある他人に対する「恥を恐れる」という心理が根深く存在していることが分かる。上にあげた諺のほかにも、次のようなものがある：

石橋を叩いて渡る

「石で作られた橋であっても叩いて、大丈夫だと確かめてから渡る」という意味である。はたから見ると滑稽な感じがするが、すべての物事に対する日本人の用心深さがみごとに表現されている。これはやはり上に述べたように、日本人は恥を恐れ、常に他人の目が気になり、他人に笑われないよう行動するという特性がよく現われている。日本人の国民性とも思われる恥を恐れる心理はまたいくつかの諺から見てとることができる。例えば、

転ばぬ先の杖
 濡れぬ先の傘
 念には念を入れ

などのようなものがそれである。

そして、社会全体を見れば、日本人は、

渡る世間に鬼はない

という世間観をもっている。すなわち、冷たいように見えても、人の情というものはあるものである。このような楽天的な世間観は、日本の自然環境と歴史環境に由来するものと考えられる。

日本は地理的な環境によって、古くから豊かな自然条件に恵まれてきた。周囲を海で囲まれ、気候は海洋性気候であり、温暖、湿潤がその特徴である。このような気候条件は生業にすぐれた条件を与えてきた。恵まれた自然環境のもとで暮らしてきた日本人が自然に対して、自然はそのままが一番美しいとするのは当然のことであり、世間に対しても、世間には悪いことはなく、悪い人はいないと認識するのである。そして、地理的に周囲を海で囲まれ、世界から隔てられている自然の条件によって、日本は異民族による軍事的な侵略、政治的な支配はほとんど受けてきていない。単一民族が一つの島国に居住し、鎖国や長い封建制度によって、社会は比較的安定していた。このことからこの日本人独特の世間観を表わす諺が産み出されてきたのであろう。言うまでもなく、「渡る世間に鬼はない」とは正反対に、

渡る世間は鬼ばかり

という諺もあるが、それは、世間は常に変化しつつあるものであって、よい面だけでなく、悪い面もあるという認識が反映されている。

また、日本には次のような諺もある：

言わぬが花

見ぬが仏聞かぬが花

見ざる聞かざる言わざる

これらの諺から日本人はストレートな伝達をできるだけ避け、腹芸や以心伝心というように非理論的な読みを重要視する志向性がうかがわれる。すなわち、日本人の好みの中に「以心伝心」があり、あまり口数多くしゃべるのをよしとしない価値観がある。黙っていても自ら心が通じ理解し合えることが日本人の理想なのである。

以上のほか、日本の諺には、「うそ」に関するものも少なくない。うそは悪い

ものであるが、場合によって方便ともなる。方便とは仏教で衆生を教え導くための手段のことであるが、

うそつきは泥棒の始まり

というように、うそは偽りの最も有用な手段であり、うそをつかない習慣を養わなければ、盗みをする恐れがあるという警告である。その一方で、

うそも方便

とか、

うそは世の宝

というように、うそをつくのはよくないが、物事が円滑に遂行していくためにはうそをつくことも必要であるという、うその機能を説いている。

2. 2. 中国人の世間観

一方、中国人は伝統を重んじる国民であるが、伝統主義は保守主義に転化しやすい。中国人は絶えず社会や経済生活に調和を見出そうとし、もっとも安全でかつ持続性のある自己保全の方法を求める。このことによって、

世情静方見,人情淡始长 (世の中のことは冷静であってはおじめてわかり、人情は淡泊であってはおじめて長続きする)

守着大树有柴烧 (大樹のそばを離れなければ、焚く薪に困らない)

与人方便,自己方便 (人への便宜は自分への便宜)

というような諺が産み出されることとなったのであろう。そして、中国人は長い歴史の中で、社会なるものを見てきた結果、

世情看冷暖,人面逐高低 (世情は冷暖を見、人面は高低を逐う)

のような冷たい世間への感慨や、「世間」と「人情」をどのように把握するのかということについての指針が諺によって示されてきている。また、世の中で生活していくためには、

行要好伴,居要好邻 (旅にはよい伴、住むにはよい隣家)

が必要となり、たとえ一時的に困窮な境地に陥ったとしても、

小不忍则乱大谋（小を耐え忍ばないと、大謀を乱す）

であるから、

车到山前必有路,船到桥头自然直（車は山に近づけば必ず路が現われ、船は橋脚に近づけば必ずとまっすぐに進む）

と信じて落胆せず、

退一步天高地阔（一步退けば天高く地闊し）

になれると楽観視することを会得してきたのである。

中国人の特性の一つとしてしばしば指摘されるのは、中国人の忍従性であるが、中国の諺に“忍”あるいは“忍耐”に関するものには、上に挙げた“小不忍则乱大谋”のほかに、

忍一日之气,免百日之忧（一日の怒りを忍んで、百日の憂いをまぬかれる）

忍字心头一把刀（忍ぶという字は、心の上に刃という字）

不受苦中苦,难为人上人（苦中の苦に耐えなければ、人の上に立つ人にならない）

不受苦中苦,难得甜中甜（苦中の苦に耐えなければ、甘中の甘は得られない）

のようなものもある。すなわち、厳しい自然環境とつらい社会の中で生存していくためには、“忍耐”が必要とされる。しかし、こういう忍耐は受身の忍耐ではなく、忍耐の中に“车到山前必有路,船到桥头自然直”とか“退一步天高地阔”とかいうように、期待、希望などが込められており、粘り強く生を追求する精神に支えられた主動的な忍耐である。

中国人が何故に忍従性、粘り強さを有するのかについては、それを自然環境と歴史的な背景に求めることができる。

中国は領土が広く、各地域の気候条件も一様ではない。海岸線は東側にしかなく、国土全体に比べると、沿岸の面積はきわめて小さく、海洋の影響はほとんどない。中国の南方は日本と類似した気候状況であるが、中国の北方地域とくに内陸地域は、これとは違って大陸性気候である。北方地域の気候条件は日本よりかなり厳しいと言っても過言ではない。大陸性気候のために寒暖の差が激しいし、雨量も少ない。住民は常に旱魃に苦しんできたが、長江、黄河のような大河があるので、時には洪水に見舞われ、家や田畑を失う目にあう。黄河

の氾濫と治水は歴史的事実として多くの記録を残してきた。中国の歴史は夏の禹王の治水から始まったと伝えられ、「大禹治水」という言葉は今でも一般に知られている。中国文明は中国北方の黄河流域から発生し、そこから次第に南の方へ拡散し浸透していったため、中国人のあらゆる観念は中国北方の黄河文明がベースとなっている。中国人は劣悪な自然の中で鍛えられ、絶えず人間の生存の場を求めてきた。

呉主恵（1989）によると、「自然環境は自然的事実を生みだし、同時に人間に教える。自然的事実の中に自然的脅威の存在が一つの内容をなしている」¹⁴のであるが、中国の歴史はある意味において、「漢民族を中心とする中国人の自然的事実に対して、挑戦し、かつ順応していく記録であったといえる」。¹⁵自然の脅威は、洪水、旱害、蝗害などが挙げられるが、これらの脅威の多くは農業生産と関係し、生存に関わるものである。このような自然の脅威は、農民に不可抗力的だと思わせ、宿命的な意識を与え、さらに生への執着という意識によって強く支配され、それによって、自然に抗しつつ、「自然に対する順応性も知り、宿命に対する調和性を覚え、知らず知らずのうちに、そこから忍従性を習得するにいたった」¹⁶のである。

歴史的環境については、歴史上幾多の王朝の栄枯盛衰は中国人の精神的特性の形成にも大きな影響を与えてきた。歴代王朝の栄枯盛衰に伴う社会の動乱の中で生存していくためには、中国人に忍従が求められた。しかし、この忍従はやはり単に受動的なものではなく、常に期待、希望をもちながら、生を追求する主動性のある忍従である。

また、

知足者常乐（足るを知る者は常に楽あり）

知足常足,終身不辱（足るを知れば、辱しめられず）

などのようなものも存在している。これらの諺から中国人特有の考え方が窺えるが、それは中国人の特性としてしばしば指摘される「楽天性」と「知足思想」である。

知足思想は、宿命観から派生したものであるが、これは老子の無欲思想に遡ることができる。老子の《道徳経》に現われた“知足不辱、知止不怠”および“莫大于不知足、咎莫大于欲得、故知足之足常足矣”がそれである。上に挙例した“知足常足,終身不辱”は、老子のこの《道徳経》が出所である。知足思想

はまた楽天性の思想的根拠となっている。そして、儒家の貧楽思想もこの楽天性の形成に深くかかわっている。呉主恵によれば、中国人は、生きるために生きるなのであって、もし生きるなら、あるいは生きられるなら、どこまでも生きて行く、すなわち徹底的に生き抜くということであり、そこに楽天性の中から粘り強い性格と簡単にあきらめてしまう性格の二律背反的な人間性を見出すことができよう。¹⁷しかし、この簡単にあきらめてしまうという性格には、生への執着を簡単に捨て去るというものではなく、やはり生への期待や希望を持ちながら、粘り強く生きていくという精神が背景に存在している。中国人は、生存するために社会に順応し忍耐しつつ、如何なる困難な境地に置かれても、常に生への執着を抱きつづけ、希望を持ちつづける国民であると言いうことができよう。

ここで、いま一つ諺を取り上げてみる。それは、

苍天不負有心人（天は意志のある人にそむかぬ）

であるが、「あきらめずに粘り強く努力すれば、いい結果が得られる」ということを、「苍天」に託しているところから中国人の“天”に対する考え方がこの諺から窺える。ここに現われる“天”は、自然現象としての“天”を指すのではなく、人の運命の主宰者としての“天”である。古代中国の人々にとっては、一般に人々の居住する大地に対して、頭上高く万物を覆っている“天”は、万物を創造し主宰する神秘的な存在、あるいは人間が死んだ後、その靈魂が上昇して宿るところなのである。すなわち、中国の古代の人々には、天は万物の主宰者であり、人の運命の主宰者であると信じられていた。これがいわゆる「天命観」であり、古くから経書により伝承されてきている。¹⁸例えば、孔子は“不怨天、不怨人、下学而上达者、知我者其天乎”と説き、《論語》にも“五十而知天命”というような説教が見えるが、「中国人の意識すると否とにかかわらず、その精神生活を原則的に支配する。中国人は天の下で生活することを意識し……『天は自分たちの運命の主宰者である』ことを信じ」¹⁹ており、そして中国人は、禍福は天の定めたものであると信じている。“天命”とは、神秘的な存在として信じられるようになった“天”が、万物を主宰するために万物に命じた絶対的な命令としての“命”である。後に“命”という言葉も使われるようになったが、この言葉は明らかに“天の命”に由来したものである。すなわち、中国人は天命を尊ぶという特性を持っているのである。天を尊敬するがゆえに、天よ

り与えられたと思われる運命を素直に受け止め、禍であろうと、福であろうと、すべて天の意志であると信じている。このような、世の中の出来事と自然界に発生した災難や禍福とを因果関係で結び付ける考え方は、儒家の“天人合一”に由来する。このような考え方は諺にも反映されており、上にあげたもののほかに、“天”や“命運”、“禍福”に関する諺が数多く存在している。例えば、

各人头上一个天（一人一人の頭上にそれぞれ一つの天）
 听天由命（天に運命を任せる）
 天无绝人之路（天には人を絶する路がない）
 塞翁失马,焉知非福（塞翁馬を失う、安んぞ福に非るを知らん）

などがそれである。これらの中には、古くから伝えられてきた封建的な教えや迷信などが含まれていることは言うまでもない。これらの諺を見ると、中国人は確かに運命というものを信じ、自分の命も天命に委ねるが、同時にまた自身自身の努力によって、運命は変えることができるものとも信じ、どれほど苦しい環境と困難が差し迫ろうとも、それを克服しながら、余裕を持って生きているのである。

なお、日本には、「塞翁馬を失う、安んぞ福に非るを知らん」という諺も存在しているが、それは明らかに中国から伝来したものであり、日本独自の諺ではない。

3. おわりに

中国の諺は数多く存在しているが、その中に集団の論理に関するものは少なく、多くは個人の修養や教訓を説いたものである。本稿で挙例した“行要好伴,居要好邻”、“与人方便,自己方便”、“忍一日之气,免百日之忧”、“小不忍则乱大谋”、“不受苦中苦,难为人上人”、“知足者常乐”、“天无绝人之路”などはいずれもそうである。ここでもうひとつの例をあげてみよう。

時事造英雄（時世は英雄を造る）

既に述べたように、中国では歴史上多くの王朝の栄枯盛衰が見られ、それが中国人の精神的特性の形成に大きな影響を与えてきた。歴代王朝の栄枯盛衰に伴う社会の動乱の中で生存していくために、中国人は忍従性を有するには有するが、同時に有力でかつ正義のある英雄に苦しい生活から救われたいとの願望

ももっていた。ここでいう「英雄」とは個人としての英雄であり、中国人には個人の力に対して一種の信仰とも言える思い入れがあると言うことができよう。劣悪な自然的環境と苛酷な歴史的環境の中で暮らしてきた中国人は、苦しい生活と厳しい政治体制のもとで生存していくために、いろいろと努力はしていきが、結局最後に頼りになるのがやはり自分自身しかないということを現実の社会状況から学ばされてきているのである。

註

- 1 藤沢衛彦 1960、pp.208～209。
- 2 藤沢 1960、p.209。
- 3 藤沢 1960、p.209。
- 4 金子武雄 1969、p.1。
- 5 金子 1969、p.2。
- 6 金丸邦三 1983、p.1。
- 7 郭紹虞 1948、p.158、引用は温端政、高橋均、高橋由利子編訳。
- 8 武占坤、馬国凡 1983、p.3。
- 9 唐啓運 1981、p.55。
- 10 唐 1981、p.58。
- 11 温端政 1991、p.13。
- 12 穴田義孝 1982、p.208。
- 13 穴田 1982、p.213。
- 14 呉主恵 1989、p.262。
- 15 呉 1989、p.262。
- 16 呉 1989、p.262。
- 17 呉 1989、p.258。
- 18 呉 1989、p.256。
- 19 呉 1989、p.256。

参考文献

- 穴田義孝 1982 『ことわざ社会心理学』 人間の科学社
 上野恵司 1997 『ことばの文化背景』 白帝社
 温 端政 1991 『諺語のはなし——中国のことわざ』 高橋均 高橋由利子編訳
 光生館
 金丸邦三主編 1983 『日中ことわざ対照集』 燎原書店
 金子武雄 1969 『日本のことわざ』 社会思想社
 呉 主恵 1989 『漢民族の研究——中国人のルーツ——』 マルジュ社
 藤沢衛彦 1960 『図説日本民俗学全集3 ことば、ことわざ編』 あかね書房

- 李 国棟 1996 『日中文化の源流——文学と神話からの分析』 白帝社
郭 紹虞 1948 『諺語研究』 開明書店
武 占坤 馬 国凡 1983 『諺語』 内蒙古人民出版社
陳 克編著 1993 『中国語言民俗』 天津人民出版社
唐 啓運 1981 『成語諺語歇後語典故概説』 広東人民出版社